

コラム

終わり良ければすべてよし

高田太久吉（金融・労働研究ネットワーク代表）

ひどい渋滞に遭遇

ここ数年恒例になっている夏のアルプス縦走は、今年は、南アルプスの南部・赤石岳と荒川三山の縦走ということになった。この発端は、昨年夏にやはり南アルプスの北岳～塩見岳縦走を終えて帰宅の車中、難行を果たして安堵感にひたっている私に、山行のガイド兼ペースメーカーである知見邦彦氏がもらした言葉であった。氏いわく、「南アルプスは、赤石・荒川三山を歩かなければ、歩いたとは言えないんだよな」

それほど多くの山を歩いたわけではない私は、氏の言葉を聞いて、これらの山は南アルプスでも相当に手ごわい山なのか、と思った。地図で見ると、容易に近づけない長野県大鹿村と奥静岡の接する深い山域にあって、3000メートルを超える頂が連続していた。それなら、来年古希を迎える記念イベントとして歩いて見るのも悪くないと考えたのである。山行の日程は、例年のように、梅雨明け直後ということで、7月末の数日に決定し、登山コースは、静岡県側の榎（さわら）島ロッジを起点とすることになった。約束の出発日に、同行者をピックアップすべく、私は早めに車で出発した。しかし、今回の山行の出だしはさんざんであった。

大月に向かうために高尾インターに入ると、たちまちひどい事故渋滞に巻き込まれ、本



線に入る前のトンネルの中でまったく身動きがとれなくなかった。一時間近くかけて数百メートル進んだが、トンネルの出口さえまだ見えなかった。これでは、待ち合わせ時間に間に合わないと思い、レーンを変更して圏央道の八王

子西出口に向かい、いったん高尾街道に出て高尾山口に戻り、国道を使って大月に向かった。途中、相模湖で高速道に入ろうとすると、ここでもまた、事故渋滞の表示があった。やむなく、国道をそのまま走って、30分遅れでようやく猿橋駅に到着した。

ここからは知見氏に運転を代わってもらい、河口湖、御殿場、静岡経由で、榎島ロッジのある奥静岡・井川地区に向かった。静岡から榎島ロッジへは、安部街道と呼ばれる27号線を使う道、南アルプス公園線と表示された60号線を使う道、三峰落合線と名付けられた189号線を使う道があり、いずれも大井川上流で井川ダムに到着する。ダムの湖畔に夏季臨時駐車場があり、そこに車を置いて、ロッジが運行するシャトルバスで1時間かけて登山口に向かうことになっている。私たちは、山奥の道路事情が分からないまま、27号線を登って行った。いくつか山間の集落を過ぎて、ダムが近いと思われたころ、突然前方に、「がけ崩れのため通行止め」の標識が現れた。

この不意打ちに気落ちしながら、1時間ほどかけて189号線との分岐まで引き返し、ガソリンの残りを確認すると、もう一度山道を1時間以上登り返すには不安があった。そこより奥にスタンドがあるとは思われず、仕方なくさらに道を下ったが、途中に見つけたスタンドはどこも日曜日のために閉まっていた。結局、インター入り口を超えてさらに街中を走ったところで、ようやく開いているスタンドを見つけることができた。

「今回は中止しよう」と弱気に

次の心配は、井川ダムからのシャトルバスの最終時間であった。インター入り口からダムまでの走行時間を考えると、間に合うとは思えなかった。案の上、山道を相当登ったところでバスダイヤの最終時間が過ぎてしまった。ケータイでロッジに問い合わせると、今日中に我々をピックアップする方途は無いとの返事であった。しかたなく、途中の道路標識に示されていた上流の温泉施設に泊まり、翌朝一番のバスで登山口に向かうことにした。しかし、施設に到着して見ると、すでに満室で宿泊は不可との返事であった。時間はすでに午後4時半を過ぎており、私は出発から10時間近く車に乗りっぱなしであった。わがガイドが、どうします？と尋ねるので、弱気な私は思わず「今回はついてないようだから、登山は中止しましょう」と言ってしまった。しかし、これから帰宅するにしても、おそらく深夜になることは明らかであった。

いずれにしてもどこかに宿を捜そうということになり、すごすごと山道を引き返した。温泉施設から20分ほど下った最初の集落で、温泉付き民宿の看板を見つけ、とりあえず、宿泊の可否を訪ねると、オーケーとの返事であった。早速荷物を運び込み、温泉で長いドライブの疲れをとり、夕食を済ませて、10畳二部屋の広々とした畳に布団を敷いて体を延ばすと、ようやく明朝改めて山に向かう気持ちが戻ってきた。

翌朝、朝食をとりながら同宿のグループの話を聞いていると、前日の山は午後から風雨が強まり、登頂を諦めて下山したとのことであった。しかし、この日の天気予報は最高で、雨の心配はまったくないとのことであった。私たちは、玄関で深々と頭を下げて見送る宿のおばさんに手を振って、晴々した気持ちで、もう一度ダムに向かって出発した。

駐車場でロッジからのバスを待っていると、やがて下山する人達を乗せたバスがゆっくりと降りてきた。それぞれにリュックを背負ってバスを降りる人たちの多くは笑顔で、山歩きの疲れも見せず、まるで遠足から帰って校長先生からご褒美をもらった小学生のような顔に見えた。私たちは入れ替わりにバスに乗り込み、もうもうと砂ぼこりを立てながら、

曲がりくねった狭い悪路を1時間かけて登山基地のロッジに到着した。

ロッジの裏側にある登山口を見落として、1キロちかく間違った道を往復するアクシデントがあったが、登山道に入ってから順調に高度を稼ぎ、殆ど樹林の道をたどって4時ごろに赤石小屋に到着した。小屋は今年の塩見小屋に比べればずっときれいで、ほぼ満員状態であったがなんとか体を延ばすことができた。何よりもうれしかったのは、正面に富士山の秀麗なシルエットを眺められたことであった。

翌朝も快晴にめぐまれ、ご来光を見た後、足場の悪い急登にあえぎながら赤石岳に登り、南アルプスの名だたる峰々を視認し、雲上にひときわ突き出した富士山の姿を存分に楽しんでから、荒川小屋に向かった。この小屋も比較的きれいで、どこからでも富士山の姿が眺められ、おいしい湧水に恵まれ、南アルプスの山小屋の貧しいイメージが改められた。

快晴に恵まれ空中散歩の気分

翌日も、これ以上は望めないほどの好天に恵まれた。ハクサンイチゲやミヤマキンバイの群生に黒ユリが混じる見事なお花畑を過ぎて、3000メートル峰が連なる荒川三山の稜線をのんびりと歩いている間、行く手には終始みごとなシンメトリーの富士山が目を楽しませてくれた。陰がほとんどない稜線の日差しは強かったが、微風で、所々足場の悪い瘦尾根で緊張する以外は、まさに空中散歩の気分であった。行程に余裕があったために、昼過ぎには最後の千牧小屋に到着し、リュックに残った食料でお腹を満たした。

下山だけの最終日は、午前中は晴れるが、午後から天気が崩れるという予報であった。私たちは早い朝食を済ませて5時半に小屋を出発し、登路とは違う樹林の道を、ひたすら下り続けた。10時過ぎに出発点のロッジに着くと、10分後に、ダム湖畔の駐車場に下るシャトルバスが出るという話であった。バスを待って集まった人たちは、いずれも無事の下山で晴れやかな顔をして、何日も重い荷物と長い山道に苦しんだ気配など感じさせなかった。

シャトルバスを降りて、急いでリュックを自分の車に納め、靴を履き替えると、すぐに走り出し、初日に泊まりそこなった温泉のある保養施設に向かった。縦走を終えて下山し、近くの温泉で体の汗や汚れを洗い流し、足腰の疲れを取ることができるのは、何ともありがたいことである。

温泉に入ると空腹を感じたが、天候の悪化が予想されるので、そのままインター入り口を目指して走り出した。すると、狭く曲がりくねった山道を10分も走るか走らないうちに、突然猛烈な雨が降り始めた。ワイパーを最速で動かしても前が見えないほどの雨に驚きながら、慎重に車を走らせたが、インターの入り口に着くころにはまたすっかり良い天気に戻っていた。今日の午後、稜線を歩いていた人たちは、どんなひどい目にあったのだろうと思う一方で、山行中、終始好天に恵まれたわが身としては、初日の惨状はすっかり忘れて、「終わり良ければすべてよし」という言葉が自然に頭に浮かんできた。

私が運転を代わり、今夏最大のイベントをやり遂げた満足感に浸りながら、帰りの高速道路を走っていると、助手席のわがガイド氏がまたも低い声で呟くのであった。「南アルプスで、残っているのは日本最南端の3000メートル峰・聖岳と、同じく最南端の這松が見られる光(てかり)岳だな」。来年の縦走は、彼の頭の中ですでに始まっていたのである。